

日本国憲法と日本人らしさ

古市 剛史

(京都大学霊長類研究所教授)

憲法の改正がしきりに議論されていた2007年の夏前、ゼミで紹介する憲法についての本を探していた私に、妻がインターネットでみつけて買ってきた一冊の小冊子を渡してくれた。

平易な文章でかかれたその本を一気に読みあげたとき、涙がこみ上げてくるのをとめることができなかつた。ご存じの方には今さらと思われるかもしれないが、その一節、「戦争の放棄」という章を転載させていただきたい。

「みなさんの中には、こんどの戦争に、おとうさんやにいさんを送りだされた人も多いでしょう。ごぶじにおかえりになったのでしょうか。それともとうとうおかえりにならなかったのでしょうか。また、くうしゅうで、家やうちの人を、なくされた人も多いでしょう。いまやっとな戦争はおわりました。二度とこんなおそろしい、かなしい思いをしたくないと思いませんか。こんな戦争をして、日本の国はどんな利益があったのでしょうか。何もありません。ただ、おそろしい、かなしいことが、たくさんおこっただけではありませんか。戦争は人間を滅ぼすことです。世の中のよいものをこわすことです。だから、こんどの戦争をしかけた国には、おおきな責任があるといわなければなりません。このまえの世界戦争のあとでも、もう戦争は二度とやるまいと、多くの国々ではいろいろ考えましたが、またこんな大戦争をおこしてしまったのは、まことに残念なことではありませんか。

そこでこんどの憲法では、日本の国が、けっして二度と戦争をしないように、二つのことをきめました。その一つは、兵隊も軍艦も飛行機も、およそ戦争をするためのものはいっさいもたないということです。これからさき日本には、陸軍も海軍も空軍もないのです。これは戦力の放棄といえます。「放棄」とは、「すててしまう」ということです。しかしみなさんは、けっして心ぼそく思うことはありません。日本は正しいことを、ほかの国よりさきに行ったのです。世の中に、正しいことぐらい強いものはありません。

もう一つは、よその国と争いごとがおこったとき、けっして戦争によって、相手をまかして、じぶんのいいぶんをとおそうとしないということを書いたのです。おだやかにそうだんをして、きまりをつけようというのです。なぜならば、いくさをしかけることは、けっきょく、じぶんの国をほろぼすようなはめになるからです。また、戦争とまでゆかずとも、国の力で、相手をおどすようなことは、いっさいしないことにきめたのです。これを戦争の放棄というのです。そうしてよその国となかよくして、世界中の国が、よい友達になってくれるようにすれば、日本の国は、さかえてゆけるのです。

みなさん、あのおそろしい戦争が、二度とおこらないように、また戦争を二度とおこさないようにいたしましょう。」⁽¹⁾

『あたらしい憲法のはなし』と題するこの本は、日本国憲法が公布された直後の1947年8月に、文部省が中学生用の社会科の教科書として刊行したものだ。憲法9条の心を、これほど明快に、過去への深い反省とこれからの世界の平和に対する強い希望をこめて書いたものは見たことがない。南京大虐殺や沖縄戦の記述について干渉をやめようとしないうちの文部科学省と同じ組織が作ったとは思えないものだ。この反省にもかかわらず、朝鮮戦争の勃発によって再び世の中に戦争気運が広がっていった1950年には副読本に格下げされ、1952年には早くも姿を消したというから、この本は、ひとときの時代のはざまに咲いた、奇跡の花のようなものだったともいえる。

日本国憲法も、あらためて読み返してみると、実に気高く力強い文章だ。その前文で、「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」とその高邁な思想をうたいあげ、第9条では「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」と、力強く宣言してしまう。これほど明快に、高い理想と行動の指針とを述べた文章には、なかなか出会えるものではない。

爆笑問題の太田光は、中沢新一との対談を取めた『憲法九条を世界遺産に』という本の中で、この憲法をなにかのはずみでできてしまった無謀で奇跡のようなものだと評している⁽²⁾。たしかに、

憲法の条文や『あたらしい憲法のはなし』を読んで感じる感動は、打たれても打たれても抵抗せずに前進をつづけ、とうとうイギリスを動かしてインドを独立に導いたガンジーの非暴力・不服従運動のドキュメンタリーを見たときの感動と似ている。そんな無防備な態度が今の世界で通じるはずがないという、ある意味まっとうな考えをもつ人たちが、この憲法をアメリカによって押しつけられた不当なものだと非難するのもうなづけなくはない。

しかし、本当にそうなのだろうか。ただ押しつけられたというだけで、こんなにも大胆な思想が憲法として成立してしまうものなのだろうか。たしかにアメリカは、日本に二度と戦争を起こさせないような憲法を作らせたかったのかもしれない。でもそれを成立させた背景には、『あたらしい憲法のはなし』にあるような、多くの日本人が共有するとても深い悲しみ、後悔、反省のようなものがあつたのではなかったか。

憲法改正について考えるとき、あまり複雑に考えすぎるとかえってわからなくなることがある。何よりもまず考えなくてはならないのは、一番基本的な問題、何のために変えなくてはならないのかということだ。

改憲についての何かの論説記事に、「改正というと、何か間違っているもの、問題となる悪いものを正すという意味だが、そもそもこの憲法のどこが悪いのだろう」という、素朴な疑問が書かれていた。憲法改正という言葉が、よりよい憲法を作るというような意味で使われていることがあるが、それなら憲法「改善」だ。憲法などというのは、とくに問題もないのに、改善などのためにそう簡単に変えていいものではない。

では改正というからには、何が悪いというのだろうか。アメリカによって押しつけられた物だから、今こそ日本人の手によって自分たちの憲法を作るべきだというようなことがよく言われるが、これ

は「改善」の理由とはなっても「改正」の理由にはならない。

しばしば語られる憲法改正の論点は二つある。ひとつは、この憲法が日本の国際貢献の足かせとなっているという点だ。だがこれに対しては、武力による貢献だけが日本の国際貢献のあるべき姿ではないという強い反論がある。野生類人猿の研究でアフリカを旅することの多い私も、この反論にはまったく同感だ。

アメリカやヨーロッパの先進国との政治的駆け引きの場ではどうかは知らないが、アフリカの国々の人と話をしている、武力による日本の国際貢献を求める意見を聞いたことはこれまで一度もない。かれらが持つ日本人の一般的イメージは、ひとことで言えば「優れた技術力をもつ無害なお人好し」といったところだろう。国際経験のとぼしい日本人だが、現地に入ってしまうと「郷に入れば郷に従え」とばかり、当然のように現地の人たちの中にとけ込んでしまう。アフリカの奥地に調査に入ればあたりまえのように現地の人たちと地酒を酌み交わすが、何十年もそこに住んでいるヨーロッパ人の宣教師やプランテーション経営者などは、ほとんどそんなことはしない。

人前で自分の意見をはっきりと言えないという日本人の弱点も、ある意味では日本人の美德だといえる。いつもにこにこしながらうなずいている日本人は、強力な敵にはならないと判断されるのだ。さまざまなプロジェクトで敵対的な力関係が現れるときでも、日本人はしばしば蚊帳の外に置かれ、仲介者としての役割を振られることも多い。

9.11の出来事からアフガニスタン戦争、イラク戦争と続く世情の中、どこに行っても、腹を割って現地の人々と話をするとアメリカに対する敵意が噴出するようになった。その敵意は、イスラム教徒に限らずほとんどすべての人に共有されているといっても過言ではなく、アメリカに忠誠を尽くす日本に対する見方も変わってくるかと思われ

た。ところが不思議とそうはならない。いくら果敢にアメリカのサポーターとしてふるまい、アメリカの軍事攻撃の後方支援をしても、今のところはまだ、日本に対する非難を耳にしないのだ。なさないことだが、「日本人のことだから、仕方なくアメリカに従っているだけなのだろう」と思ってくれているとしか考えられない。

アフリカの中央部のコンゴ民主共和国で内戦が起こっていたときに、入国しようとして空港のイミグレーションで拘束されたことがあった。反政府勢力を支援するウガンダ共和国の出入国スタンプがあったため、スパイの容疑をかけられたのだ。研究の対応機関の所長にも説明してもらい、3時間後によく釈放されたが、最後に係官は、お尻から悪魔の尻尾が生えている真似をして見せながら、「おまえがアメリカ人かイギリス人だったら、決して釈放していない。日本人はまあ、悪いことはしないから」と言って笑った。同じ頃、ウガンダではゴリラを見に訪れた十数人の観光客が反政府ゲリラに拉致される事件が起こった。拉致のあと、ゲリラは観光客のパスポートをひとりひとりチェックして、イギリスと関係のある国の人だけ暴行を加えて殺し、あとは解放したという。

イギリスと足並みをそろえてアメリカの軍事行動を支援する日本が、いまだに敵意の対象とならないのは、まったく不思議なことだと言わざるを得ない。これは、そうしようとしてできるものではない。おそらく、良くも悪しくも日本人のもつ日本人らしさが、敵意の対象となることを妨げてくれているのだろう。だが、これがいつまで通用するのかはだれにもわからない。

日本が憲法を「改正」して軍事面での国際貢献を強めたとしても、それを喜んでくれるのは欧米の一部の政治勢力だけだ。その他多くの世界の人からは、失望と敵意を向けられるだけだということに覚悟しなくてはならない。それよりも、優柔不断で無害だと見られている私たち日本人には、

そういったイメージを活かした民生面、経済面での国際貢献の方法がいくらでもあるはずだ。軍事面での貢献ができなければ国際的に非難されるというが、そういうことを本当に口にしてしているのは、ほとんどアメリカと日本の政治家だけなのだ。

改憲のもうひとつの理由として挙げられるのは、軍事力の行使の制限がある現在の憲法では、国民の生命と財産が守れないというものだ。だがこの点にも疑問がある。

外国からの武力をとまなう敵意に対する対応としては、大きく分けて三つの立場があり得る。一つ目は、ガンジーのように、攻撃されてもそれをよしとして抵抗しないという姿勢である。だがこれには、相当の覚悟がいる。私自身、私や私の家族にいきなり暴漢が襲いかかってきたとしたら、戦わずにそれを受け容れる自信はない。

二つ目は、実際に敵が襲いかかってきたときに限って、自分を守るためのみ戦うというものだ。現在日本がもつ自衛隊は、基本的にはこの専守防衛を体現するものだ。もちろんこれは、かなり無理のある憲法の拡大解釈に基づくものであるが、おおかたの日本人の合意が得られているのも事実だろう。

しかしこれでは日本人の生命と財産が守り切れないという、三つ目の立場の議論がある。日本に向けてミサイルが撃たれる前に、そのミサイル基地を破壊せねばならず、不当な核兵器を開発しようとする国は、そうなる前に力をもって押さえ込まなくてはならないというわけだ。しかしそれは、本当に自分たちを守ることになるのだろうか。しばしば仮想敵国とされる国々を考えてみても、日本がミサイル基地を破壊すればだまって引き下がり、軍事力をもって圧力をかければ核開発をあきらめるだろうか。それぞれに自国の安全と発展を目指している国同士がぶつかり合う限り、よほどの力の差がない限り、一方の圧力で一方がだまって引き下がるということはあるまい。それとも

日本は、他のいくつかの国と組んで、泣く子もだまる圧倒的な軍事力の一部になろう、なれると考えているのだろうか。

自国の領土の枠を越えた自衛目的の武力行使にも、良識に基づいていろいろと制限を加えることができる考える人もいるが、それは幻想にすぎない。どこまでを自衛だと思えるかということについては、どうにでも理由がつくし、その理由を考えるのも承認するのも、基本的にはそのときの権力者なのだ。あのアメリカのイラク攻撃ですら、自衛を大義名分のひとつとして行われた戦争であったということを忘れてはいけない。

今の憲法が許すのは、厳密に言えば一つ目の非暴力主義だ。だが、法律というのは拡大解釈されるものであり、そのぎりぎりの線として、二つ目の専守防衛としての自衛隊がおおかたの承認をえている。自民党などから出されている憲法「改正」案は、いずれもさらにこの一線を越え、自国の領域から出た武力行使を、国民および国会の十分な議論と承認のもとで認めることに道を開こうとする三つ目の立場に立つものだ。だが、この一線を越えたが最後、武力行使については何の制約もなくなると考えた方がいい。

専守防衛に徹するという姿勢には、非暴力主義とまではいかなくとも、それに似た覚悟が必要である。先制攻撃をかけられれば、どうしても被害はこうむるし、あるいは戦いに敗れて占領の憂き目を見るかもしれない。だが、だからといって一線を越えたとしても、そのむこうにも生命と財産を守れる平和はない。

ここはひとつ、日本人の日本人らしさを存分に発揮して、攻められた時以外戦いませんという態度を貫き、攻められないための平和外交、民生面での国際貢献に力を注ぐべきではないか。今の日本の平和外交や国際貢献は、一部の政治家や思想家が声高に非難するよりも、はるかに高く評価されているのだ。私たちはもっと、強い覚悟と自信

をもつべきだと思う。

「けっして心ほそく思うことはありません。日本は正しいことを、ほかの国よりさきに行ったのです。世の中に、正しいことぐらい強いものはありません。」

註

- (1) 『あたらしい憲法のはなし』 童話屋（青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/>にも収録）
- (2) 『憲法九条を世界遺産に』 太田光、中沢新一著、集英社新書